

大相撲テレビ観戦 印象雑記

～平成 29 年 5 月場所～

◆序盤（初日から 5 日目まで）

稀勢の里の回復状況に注目した初日だったが、やはりまだ完治していないどころか左を十分に使うことができない状態だった。嘉風の攻めになすすべなく土俵外に飛び出た姿から、本来ならば休場した方が良いような状態と読み取った。

「大関を目指す」というキャッチフレーズが付いた高安、今場所はこれまでの場所とは異なる表情と腰の構えになってきた。勝負師の顔、負けない顔、自信を持って勝負に挑む顔つきになってきた。常に腰が下りて、腰全体で体を前に進めているので、相手は何も出来ない。

上位陣では白鵬・日馬富士の相撲が光っている。白鵬は「勝ちたい・優勝したい」という一心が窺える気迫がある取り口で、見方によっては「過熱気味」で危険な感じもする。早さ・低さ・圧力・臨機応変の対応力すべてにおいて力を感じる。

日馬富士にはそのような過剰な気負いはなく、日馬富士らしい速い・鋭い攻めが続いており、気負いが無い分だけ白鵬より良いかもしれない。

序盤の相撲の中で強く感じたことは、次世代を感じさせる「新しい力の台頭」。

年齢的には若手とは言えないが、関脇に定着して独自の境地を作り上げつつある玉鷲。毎場所目に見えて強くなっている御嶽海は小結の座でのびのびと相撲を取っている。はつらつとした相撲で前頭筆頭を謳歌する千代の国、西の筆頭に進出し全盛期の相撲に戻りつつある遠藤、常に前に圧力をかけながらの突き押しを繰り返す北勝富士・大翔丸、下から突き上げるような押し相撲の阿武咲、小柄であるが常に全力投球で何が飛び出すかわからない宇良・石浦、改名した小柳改め豊山・・・などなど。

勝ち負けはともかくとして、新しい名前が進出してきて、これまで「次世代を担う・・・」とか「次の大関候補」とか言われ続けてきた力士がずるずると後退を余儀なくされてきている。相撲界が次のページに向けて大きく動き始めていることを強く感じることができる序盤の土俵だった。

◆中盤（6 日目から 10 日目まで）

序盤のもたつきが終わり、それぞれの力士が「今場所の力」を具体的に見せ始めるのが中盤の土俵。

10 日目を終えて、優勝争いは白鵬・日馬富士・高安の三力士に絞られてきた。

白鵬の顔から「勝ちたい」という焦りの表情が消えて、淡々としかも手際よく鋭い「白鵬相撲」を發揮出来るようになってきた。10 日目、高安との直接対決は全盛期の白鵬を思わせる取り口で、高安を土俵外に運び出した。

一方相撲の速さと攻めが光る日馬富士は、昨日の玉鷲戦で足を痛めたはずだがものともせず栃煌山を一直線。高安が優勝争いから脱落したが、白鵬と五角に戦える力を備えてきた感じがした。賜杯を賭けた両横綱の対決という図式になってきた。（下表参照）

全勝	1 敗	2 敗
白鵬・日馬富士	なし	照ノ富士・高安・正代・栃ノ心・宇良

マスコミは「高安大関昇進の場所」と騒ぎまくっているが、白鵬に勝てなかった今、これから終盤で対戦する日馬富士戦を落とすようだと、例え 12 勝 3 敗となっても周囲から雑音が出かねない。何としても横綱からの星を一つぐらいはあげておく必要があるだろう。

もう一人の関脇玉鷲も 7 勝 3 敗で賜杯争いのすぐ後ろを追走している。素早い踏み込みと同時に伸びる長い手での一突き目、そして間髪を入れず伸びる二本目、腰の重心が定まってしかも前進しているので相手に与えるインパクトが大きい。高安騒動の陰でじわじわと星をあげていて、色々な意味で不気味な存在だ。

御嶽海・千代ノ国・遠藤ら若手が白星を上げられず苦労している中で、期待の若手の一人北勝富士が力強い

押し相撲で善戦している。正代・宇良がいつの間にか2敗を守って、ベテラン栃ノ心とともに賜杯争いの一角に名を連ねてきた。

◆終盤（11日目から14日目まで）

稀勢の里がようやく休場を決意した。相撲を見ている多くの人が「早く休場して治療に努めるべきでは・・・」と見ていたので、異論も雑音も聞こえては来なかった。ファンが味方してくれる強運は大切だ。

終盤に入るやいなや、日馬富士が御嶽海に撃沈され、多くの人が期待していた「千秋楽東西横綱同点対決」は崩れてしまった。脇を固めて下から押し上げる御嶽海の相撲が毎場所少しずつ上位に通じるようになってきている。

かたや白鵬は日に日に落ち着きと鋭さを増してきて、向かうところ敵なしの状態。

高安も10日目に白鵬に敗れた後を引きずらず、腰の座った重心が低い安定感で、攻めても守っても力強さを発揮し、2敗を堅持。

照ノ富士が2敗でぴったり付いてきているのが想定外だったが、粗雑・乱暴な取り口が目立つようになってきた。故障中の膝は完治しておらず、取り組み後にびっこを引いている状態。更にこういう相撲を取っていると怪我を悪化させる恐れがあるばかりか再び怪我をする可能性もあるし、相手にも怪我をさせる可能性もあり注意を要する。

遠藤・千代の国・千代翔馬・大栄翔ら上位に進出した新しい力が壁に跳ね返されて負け越していく中で、小兵の宇良が優勝争いの一角に名を残しているのも印象的な風景。また、北勝富士・貴景勝・輝・阿武咲の押し相撲が星をあげてきたのも注目に値する。13日目を終って

全勝	1敗	2敗	3敗
白鵬	なし	照ノ富士・高安	栃ノ心・宇良

14日目を終ったところで、白鵬の38回目の優勝が決まり、高安の大関昇進が内定してしまった。場所の興味は、「全勝するか？」と「三賞の行方」に絞られてしまった。いつものように「俺ならこうする、殊勲賞・技能賞・敢闘賞」を考えてみた。

殊勲賞は優勝戦線の一角に名を連ねて大関昇進を手に入れた高安。技能賞は脇を固めた前進相撲を確立した御嶽海、または小兵ながら工夫を重ねて勝ちを得る宇良。敢闘賞は徹底した突き押し相撲で新入幕ながら二桁の白星を並べている阿武咲または自己最高位前頭7枚目で健闘した北勝富士。如何かな？

◆そして千秋楽

千秋楽結びの一番の横綱決戦は、白鵬の優勝が決まってしまつてつまらない一番になるのではないかと危惧していたが、何と想像を絶する熱戦となりテレビで見ても力が入った。白鵬の相撲を熟知した日馬富士ならではの攻めで、白鵬は欲しい上手に手が届かない。長い攻防の後、白鵬が日馬富士の脇腹をパチンと叩く、日馬富士の微動の一瞬をとらえて上手を掴んだ白鵬、これで勝負がつくきっかけとなってしまった。

38回目の優勝、通算勝ち星1047勝の魁皇の記録ももう目の前にまで迫ってきた。

千秋楽の相撲が始まる前に三賞の発表があった。殊勲賞は御嶽海、技能賞は高安・嘉風、敢闘賞は阿武咲と発表された。テレビ放送の解説である北の富士がアナウンサーにいくつか異論・疑問を投げかけていたが、彼の見解が前述の私の案と酷似しているのが面白かった。

高安は照ノ富士の乱暴な相撲で肘を曲げられたまま投げられ、11勝4敗と尻つぼみになってしまった。黒星で終わってしまったばかりか、（私見だが）肘の関節を痛めた可能性があり、若干の心配が残った。

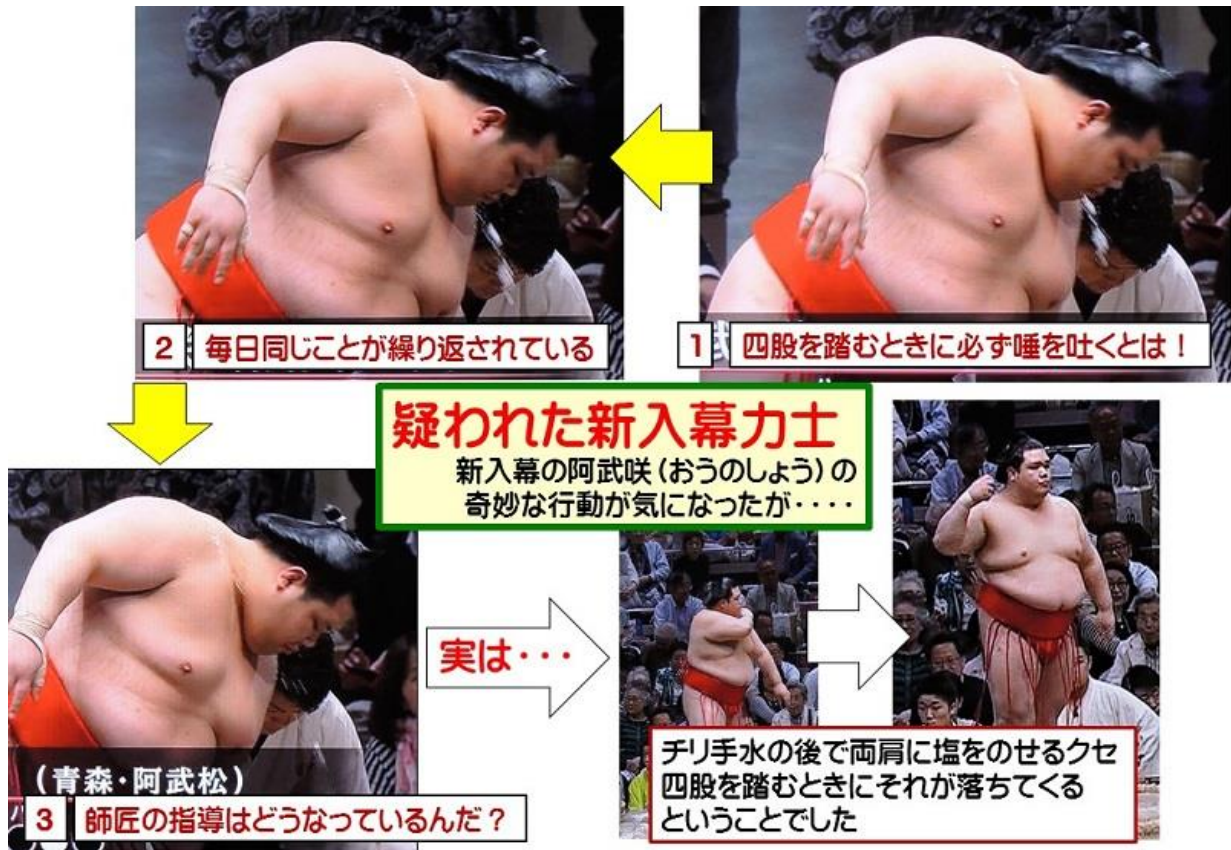
玉鷲10勝5敗、御嶽海8勝7敗、嘉風8勝7敗と琴奨菊を除く関脇・小結は皆勝ち越し、次の幕が面白くなってきそうな終わり方になった。

横綱・大関と対戦する前頭上位の力士はことごとく負け越してしまい、中位の力士の好成績が目立つ結果となった。その中でも北勝富士10勝5敗・元関脇ではあるが栃ノ心12勝3敗・正代10勝5敗・貴景勝11勝4敗・勢9勝6敗・輝9勝6敗が光っていた。また、前頭下位で宇良11勝4敗・新入幕の阿武咲10勝5敗も輝いていた。ベテランの栃ノ心・勢を除けば、新入幕で負け越して跳ね返された小柳改め豊山も含めて、相撲界のニューウェーブと呼べそうな顔ぶれで、次の時代が楽しみになってきた。

◆今場所気になったこと

新入幕の阿武咲（おうのしょう）が若々しい押し相撲で注目を集めた。北勝富士とともに引き技をあまり使わない押し相撲として評価が高かったが、土俵上のマナーで気になった。

呼び出しに呼び出されて土俵に上がり、二字口でちりを切った後に四股を踏む時に唾を吐く癖がある。テレビ画面に映った日にはほぼ毎日やっているようだ。神聖な土俵に上がるための神事の最中に土俵に唾を吐くとは何事か？と思ってスローモーション映像をコマ送りして検証してみたら意外なことが判明した。



力士の体型の大型化というよりも肥満化・巨大化の傾向にあるように感じる。幕内力士の平均体重が 150～160Kg だと言うから驚きである。土俵下に転げ落ちた後ですぐに起き上がれないような力士もいるようだ。新弟子として入門すると「体を大きくせよ」とのことで、かなり意図的に食事を多く取るそうだ。激しい稽古で体が痛めつけられている時期にはバランスが取れているのかもしれないが、十両入りしたり入幕したりでホットして段々に稽古量が少なくなると肥満化が始まる。そして糖尿病予備群化する者と腰膝などの関節を痛める者とに分れる。更なる高みを目指して激しい稽古を続ける力士はまだ良いが、地位に甘んじるタイプの力士は体の張りが減退し始めるのでテレビ画面を見ているとわかる。

そして現役引退後、80才・90才まで生きた人の方が少ない相撲界、社会問題としてもとらえざるを得まい。力士の大型化傾向を論議する昨今、それとは逆に小型力士が活躍するようになってきた。体が小さくてもそれなりの稽古・精進を積み上げれば上位に上がることができるという事例を見て入ってくる小型力士が増え始めているらしい。大型化傾向に歯止めをかける効果があれば・・・と思う昨今である。

突き押し相撲の復権か？突き押しを基本とする力士を幕内下位から関脇まで数えてみる。

豊山・千代大龍・大翔丸・阿武咲・豊響・琴勇輝・北勝富士・輝・貴景勝・豪風・碧山・大栄翔・御嶽海・玉鷲。突き押しの相撲と一口で言っても、豊響きのように突き切る・押し切るタイプの力士から、千代大龍のように三の手で叩くことを前提に激しい突き押しをする力士まで、その形は様々である。

今場所の玉鷲・北勝富士・御嶽海・輝などを見るように、立ち合いの踏み込み、きちんとした腰の構え、手の伸びと同期した腰の動き、重心の前への移動と同期が取れた二の手・三の手などの基本的な技術が確保で

きていないと効果は上がらない。この道を歩む力士が増えることは、「基本技術の踏襲」の意味からも有意義なことだと思う。

怪我で十両に陥落した安美錦、今場所は西十両 8 枚目で 9 勝 6 敗と二場所連続で勝ち越し。10 月には 39 才になるが十両の土俵で健闘を続けている。このペースだと上手くいけば九州場所か初場所に再入幕が可能かもしれない。更なる故障が発生しないことを祈るばかりの場所が続く。

一方、同じ時期に膝を怪我して安美錦と同時期に十両に陥落した豊ノ島は、今場所は幕下東 19 枚目で 3 勝 4 敗と一点の負け越し。こちらはまだまだ苦悩と苦闘の日が続くようだ。

この二人がいない幕内の相撲は寂しいと思っているのだが、前述のように日を追って新しい力が進出して活躍しているので、道は相当険しいに違いない。

おかげで、時々十両や幕下の相撲をビデオ録画して鑑賞することが多くなった。

以上